平成 28（2016）年 5 月 25 日発刊

南極ＯＢ会　会報

Ｎｏ．２８

発行　南極 OB 会
会長 国分 征
編集　広報委員会

今号の主な内容

○第 56 次越冬隊帰国報告　○南極観測再開 50 周年行事の報告
・「ふじ」展示 30 周年記念事業と「ふじの時代」講演会・パネル討論会、
・「しらせの時代」講演会を企画して
○話題：南極教員派遣プロジェクトに参加して　○南極関連情報
○南極 OB 会の本の紹介　○会員の広場（訃報、総会・ミッドウィンター祭、写真募集、アーカイブ）
○広報委員会からのお知らせ

第 56 次越冬隊帰国報告

越冬隊長　三浦英樹

越冬交代式を終え、笑顔の越冬隊の皆さん

第 56 次越冬隊は、3 月 27 日に 26 名全員が無事に帰国しました。この間、OB 会の皆さまには常に温かい励ましと御支援をいただきましたことを改めて深く感謝致します。帰国にあたり、今回の越冬隊の概要を以下に簡単に報告致します。

１．昭和基地の維持管理と越冬隊の運営

53 次と 54 次に「しらせ」が接岸できなかったことを受けて、昭和基地の燃料消費削減のために、56 次隊は、越冬隊員数が 26 名と小人数編成で計画されました。その後、55 次、56 次夏期の二年連続の「しらせ」昭和基地接岸によって、越冬開始時には燃料備蓄が回復しましたが、将来、再び接岸できない事態も想定して、当初の予定通り、越冬期間は節電と消費燃料節約に努めました。また、隊員数の少なさは、観測、除雪等の基地の維持管理作業や広報活動等において一人当たりの負担を大きくすることとなりました。一方で、大規模プロジェクトが少ないこともあり、通常の観測隊では取り組めなかった、基地施設の保守点検、防災対応の見直し、在庫管理システム、アウトリーチ活動の質の充実、観測隊の運営システムの見直しを可能な限り行い、今後の南極観測の安全性や効率化の向上に貢献することも目指しました。越冬期間中、大きな負傷･物損事故は発生しませんでしたが、発電機部品の不具合等による基地全停電が 4 回発生しました。基地主要部および周辺の積雪状況は、50 次隊以降続く多雪傾向が依然として認められ、ブリザード回数も平年より多かったことから、建物・設備の維持および日常の安全管理、防災活動に備えた除雪作業には重機の使用を含めて、年間を通して大きな労力を費やしました。

２．基本観測

電離層・気象（地上気象、高層気象、オゾン、日射・放射、天気解析）・潮汐・測地部門の定常観測、および宙空圏（オーロラ、自然電磁波、地磁気）・気水圏（温室効果気体、雲・エアロゾル、氷床質量収支）・地殻圏（重力、地震、GPS、VLBI）・生態系変動（ペンギン個体数調査）、地球観測衛星データ受信を対象領域とするモニタリング観測を概ね順調に実施しました。

レスキュー訓練

ブリザードでドア埋まる

トピックスとしては、定常観測の気象部門が担当したオゾンホールと積雪深の話題が挙げられます。米国航空宇宙局（NASA）の衛星観測データの解析によると、2015 年の南極上空のオゾンホールは、例年縮小を開始する 9 月中旬以降も拡大し続け、10 月 2 日に年最大値となり、南極大陸の約 2 倍の面積である 2780 万㎢まで拡大しました。オゾンホールが南極大陸の約 2 倍の面積まで拡大したのは 9 年ぶりです。また、10 月に観測されたオゾンホールの面積としては、衛星観測が開始された 1979 年以降で最大でした。世界気象機関（WMO）の国際的な枠組みの観測のひとつとして、昭和基地では、地上から大気上端までのオゾン全量の観測およびオゾンの鉛直分布の観測が実施されています。オゾンホール面積の推移と対応するように、11 月末から 12 月に昭和基地上空で観測されたオゾン全量は、累年平均値よりも少なく、特に 12 月の月平均オゾン全量は、過去 2 番目に少ない値となりました。2015 年のオゾンホールの発達は、南極上空の下部成層圏（高度約 20 ㎞）において、オゾン層の破壊を促進する、−78℃以下の低温域が、例年より継続して広がっていたことが要因として考えられるようです。

昭和基地では、1999 年から積雪深計による観測を開始している。2015 年の最大積雪深は 185 ㎝（9 月 25 日）を記録し、観測開始以降の最大値を示しました。この多雪傾向は、2009 年以降続いていますが、その要因は明らかにはなっていません。

３．研究観測

重点研究観測では､｢南極域から探る地球温暖化」サブテーマ「南極域中層・超高層大気を通して探る地球環境変動」として、大型大気レーダー観測、レイリー／ラマンライダー観測、ミリ波分光観測、MF レーダー観測、OH 大気光観測、全天大気光イメージャ観測、CO_2 ゾンデ観測を昭和基地で実施しました。特に、大型大気レーダーについては、全 55 群のシステムが完成し、9 月末からは１年間の連続観測を開始しました｡またサブテーマ｢氷期－間氷期サイクルから見た現在と将来の地球環境」として、ペンギンルッカリー遺物から見た氷床変動と環境変動の復元を実施しました。

一般研究観測では、第Ⅷ期後半計画として採択された課題では、宙空圏分野の研究観測として「SuperDARN レーダーとオーロラ多点観測から探る磁気圏･電離圏結合過程｣､｢太陽活動極大期から下降期におけるオーロラ活動の南北共役性の研究｣、「小電力無人オーロラ観測システムによる共役オーロラの経度移動特性の研究｣、「極域から監視する全球雷・電流系活動と気候変動に関する研究｣、「昭和基地における VLF 帯送信電波を用いた下部電離層擾乱に関する研究」に関連して短波レーダー観測、オーロラ光学観測、無人磁力計観測、大気電場観測、ELF および VLF 電磁波観測を実施しました。また、気水圏分野の研究課題として、「エアロゾルから見た南大洋・南極沿岸域の物質循環過程｣、「極限環境下の南極観測隊における医学生物学的研究」として、レジオネラ属菌調査および自律神経系の調査等を行った他、公開利用研究「南極紫外線が生物に及ぼす影響と南極由来のセルロースに関する研究」も実施されました。

ブリザードでダクトに雪が混入

４．設営作業・野外行動

設営各部門が担当する昭和基地等における各種作業も当初の計画通り、概ね順調に実施しました。特に、11 月 19 日には、3 年がかりで建設してきた新汚水処理施設への配管切替を完了して、運用試験を開始しました。

基地以外の大陸沿岸露岸域に設置されている無人観測装置の保守、ペンギンルッカリー遺物調査、ペンギン個体数調査および内陸旅行準備などを目的として、通年にわたって基地からラングホブデ、スカルブスネス各拠点まで海氷上ルートを設定・維持し、極夜明け以降 12 月までの間、野外行動を活発に行いました。また、内陸域では 10 月下旬の 8 日間にわたって、人員６名で H226 地点までの往復旅行を実施し、気水圏変動のモニタリング観測（雪尺測定、積雪サンプリング)、宙空圏分野の一般研究観測（無人磁力計保守)、気象定常観測（移動中の気象観測)、ルート整備および車両・橇走行試験等を行いました。

汚水処理施設の汚泥出し作業

５．ＤＲＯＭＬＡＮ（ドロンイングモードランド航空網）への対応

2015/16 シーズンのフライト計画に従って、内陸旅行準備と平行して、大陸上航空拠点 S17 における JET A-1 航空用燃料デポおよび昭和基地における海氷上滑走路造成、通信と気象情報提供を行いました。11 月には、昭和基地前の北の浦海氷上では、積雪を雪上車で圧雪して、長さ 1000m、幅 30m の滑走路を造成した。同月 18 日、19 日、23 日に、バスラー機がノボラザレフスカヤ基地からプログレス基地に飛行する途中に立ち寄り、ドラム缶 22 本（6 本、10 本、6 本）を給油しました。また、S17 における航空機発着は、プログレス基地からノボラザレフスカヤ基地に飛

行する途中のバスラー機が 1 月 15 日に緊急物資輸送（ブルドーザ部品）のために立ち寄りました。

本格除雪風景

６．情報発信

南極観測による学術的成果や観測隊の活動状況を広く社会に発信するため、インテルサット衛星通信設備によるインターネット常時接続回線を利用した TV 会議システムで国内の小・中・高等学校等と昭和基地を結んで、南極教室を 34 回実施した他、国立極地研究所南極・北極科学館におけるライブトークをはじめとする国内の各種企画 5 件に参加し、越冬活動の紹介や児童・生徒の質疑応答を通してアウトリーチや広報活動に協力しました。この南極教室のうち、13 件は、タブレットのビデオ通話システム（FaceTime）を利用した簡易版として実施し、極めて小人数で観測隊の運営に負担が少ない広報活動の簡便化と活発化を実現しました。「第 11 回中高生南極北極科学コンテスト」で選ばれた優秀提案 1 課題の実験を昭和基地で実施し、11 月の南極北極ジュニアフォーラム 2015 において TV 会議で報告しました。観測隊公式ホームページ「昭和基地 NOW!!」には、日常的な話題から 49 件の原稿を作成して掲載しました。その他、テレビ・ラジオ番組への出演、地方紙・機関誌等への記事提供や寄稿を積極的に行いました。

南極観測再開５０周年行事の報告

「ふじ」展示 30 周年記念事業と「ふじの時代」講演会・パネル討論会

東海支部　長田和雄（27 次冬、45 次冬）

南極観測船「ふじ」が名古屋港に展示されて 30 年となることを記念して、平成 27 年の名古屋はイベントが目白押しだった。名古屋みなと振興財団による特別展示「南極大陸と南極観測船ふじの航跡～「ふじ」が教えてくれたこと～」が 7 月 18 日に始まり、南極 OB 会東海支部を中心とする「お宝展示会」、森田マジック教室との連携による「南極マジックと南極トーク～私のお宝を語る～」、アマチュア無線連盟愛知県支部との共催によるアマチュア無線特別局（8J2JSTY）の運用、地元の大学・カルチャーセンターと連携した南極講座の開催である。また、10 月 18 日には、南極 OB 会本部と協力し、南極観測再開 50 周年を記念した講演会「ふじの時代」とパネル討論会も行った。この講演会の後には、「ふじ」を見ながらの懇親会があり、40 名が「南極観測船ラベル」の日本酒等を楽しみ、世代を超えて親睦を深めた。

南極マジックショウを演じる岩坂実行委員長。
箱から出てきたのは？！

それからほぼ半年が過ぎた。ここでは準備も含めて、一連の記録を報告しておきたい。なお、平成 27 年 9 月までのイベントの様子や演題等については、会報第 26 号に詳しいのでそちらをご覧頂きたい。

爆笑を誘う五味支部長のお宝トーク

名古屋での催しについて具体的な検討が始まったのは、今から約 2 年前である。名古屋港ポートビルの一室に東海支部員、「ふじ」説明ボランティア、博物館員が集い、記念日の洗い出しや全体のスケジュール予定、イベント案や費用の検討など、岩坂実行委員長の強力なリーダーシップのもとで準備が始まった。平成 26 年の暮れから平成 27 年の春にかけて、東海支部や OB 会（全国）への「お宝拝借願い」のメールを送り、最終的に 26 名から 241 点のお宝が寄せられた。お宝は、写真やパネル、スケッチ、南極の石、昭和基地や船内で作ったお宝、記念消印つきの切手や電報、新聞、赤道通過予想の賞状、盾など、多岐にわたった。これらのお宝はイベント終了後に返却しているが、そのまま博物館に寄贈されたものも 168 点あった。ちなみに、「ふじ」や「南極」にまつわる「お宝」は、いつでも寄贈を歓迎とのことである。

昭和でのおせち料理（蝋細工で復元）を紹介する五味支部長。重箱は現地で人数分を作成。

お宝展の会場では、土日を中心に元観測隊員（11 名）とふじボランティア（5 名）が展示を案内し、91 日の開催期間中の 1/3 強の日についてお宝の解説にあたった。これには、「フリーカレンダー」という無料 web サイトを使って、日程や展示案内の情報を共有しながら進めた。ポートビルに通うだけでもけっこうな時間（と費用）がかかる中、遠方からボランティアに立ってくれた関係者の皆様には、この場を借りてお礼申し上げたい。入場料が必要な特別展「ふじ」への日別来場者数と、ボランティアの記憶による解説人数との対応関係から、期間中のお宝展への入場者数は 9390 人と見積もられた。その他、3 回のお宝トークには延べ人数で約 160 人、10 月 18 日の記念講演会では約 100 人の参加者だったので、合計すると 9,650 人が「南極」に親しんでくれたことになる。また、「ふじ」の無線局（JSTY）にちなんだコールサインを使用してのアマチュア無線特別局の運用では、局長の吉川さん始め 16 名のボランティアが参加し、8 月 14 日の開局から 10 月 25 日の閉局までの期間に 5,082 局（海外 13 局を含む）と交信した。相手局には、「ふじ」の写真付き記念 QSL カードが発行された。

あっという間に食べ物がなくなった懇親会。
国分会長の「もうないの？」の声が聞こえそう

「ふじ」を懐かしむ同窓会も多数開催された。何名以上を同窓会と呼ぶかはさておき、会報第 27 号に一部掲載されているように 9 次、12 次、13 次、14 次、15 次、21 次、24 次の元隊員たちが、「ふじ」を懐かしんで集まった。「ここに集まっただけでもみんなヒーロ

ーだろ」との声を聞いたが、まさにその通りと感じた。同窓会や艦内閲覧時の会話を録音しておけば、それだけでも貴重な資料になったのではなかろうか。「ふじ」に関する一般向けの書物が少ないこともあり、建造にいたる経緯や運用の秘話など、「ふじ」に関する記録を今のうちにぜひ残しておいて欲しい。記録についても「お宝」と同様に「ふじ」博物館へご一報頂きたい。

「村山隊長と極点旅行」：
遠藤八十一氏（第 9 次隊、新潟支部）

「南極隕石第 1 号の発見談」：
成瀬廉二氏（第 10 次隊、山陰支部）

「南極の食生活：国内との違い」：
五味貞介氏（第 13,21 次隊、東海支部）

会場の様子

司会進行 榊原智康氏
（東京新聞・中日新聞）

パネラー：小塩哲朗氏
（名古屋市科学館）

パネラー：児玉剛氏
（環境創造研究センター）

パネラー：東田和弘氏
（名古屋大学博物館）

パネラー：山中信子氏
（愛知県教育委員会）

パネル討論会の皆さん

「しらせの時代」講演会を企画して

阿保敏広（35 次冬、45 次冬）・三枝　茂（37 次夏）

2016 年 1 月 23 日～24 日にかけて開催された「しらせの時代」講演会は、100 名を超える来場者があり盛況となりました。当日行われた講演内容と企画の様子について報告します。

○講演内容

昨年 10 月 18 日に南極観測船ふじで行われた講演会に続き、今年の 1 月 23 日に南極観測船初代しらせが就役していた 25 次～49 次の間の活動などをテーマとした講演が行われました。当日の講演内容は以下のとおりです。

・「南極オゾンホール、定常気象隊員はどう観測し、伝えたか」：
松原廣司(第 21,29,46 次隊員、茨城支部)
・「氷床ドーム深層掘削計画顛末」：
東信彦(第 30,36 次隊員、長岡技術科学大学学長)
・「第 38 次・39 次南極地域観測行動」：
帖佐正和(第 38,39 次しらせ艦長)
・「しらせ電機推進装置」：
大木淳(第 25,29,30 次機関科、オーロラ会事務局長)
・「大型大気レーダー観測、パンジー計画」：
佐藤薫(第 44 次隊員、東京大学理学系研究科教授)
・「南極コケ坊主の発見」：
伊村智(第 364245,49 次隊員、国立極地研究所教授)
・「SHIRASE の現在と OB の皆様へのお願い」：
三枝茂(第 37 次オブザーバー、一般財団法人 WNI 気象文化創造センター)

南極観測隊の任務を遂行している間は、それぞれの隊員がどのようなことをしているのかを知ることができましたが、今回は、隊次の枠を超えた経緯を追うことが出来ました。その一方で隊員が多くを知ることが出来なかった操船の苦労話やしらせの機関の話はとても印象的でした。

それぞれの現象の発見やプロジェクトの実施話についても計画段階から設営、調査、分析時の苦労やウラ話も聞くことができ、それぞれのテーマに対する熱い情熱を感じ取ることができました。

○しらせの時代講演会を企画して

この講演会は前年の春から企画が持ち上がり、多くの方が先代しらせ（現 SHIRASE）で当時の姿に親しんでもらえるようアイデアを出し合い、船内に一晩滞在体験企画も盛り込みました。

実際に滞在した元隊員の方々は 30 名あまりとなり、大変喜ばれておりました。当日は、しらせ乗員 OB（オーロラ会）の案内による船内見学会、しらせ時代を代表する話題をテーマとした講演会、懇親会、そして一晩滞在体験の 4 部構成としました。

船内見学会と講演会は一般公開としましたが、一晩滞在体験については、大きな船体であるが故に管理面の課題もあったことから、OB とその関係者に限定させていただき、関東在住の OB にはメールや葉書でご案内しました。

会場設定や当日のシナリオ設定についても度重なる打合せを行い、SHIRASE における運用上のルールに従いながら実施することができました。通常の会議施設やホテル等の会場とは違い、船という特殊な場所での開催となったため、専門の業者などに依頼するようなこともなく殆ど手作りでの開催です。自由度の高さが効いた反面、準備に多くの時間を費やしましたが、おかげ様で事故もなく無事閉会することができました。

参加して頂いた皆様や準備に関わってくださった皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。また機会がありましたら SHIRASE での開催を企画できればと思います。

※これらの講演の模様は、YouTube を通じて公開予定です。

開会に先立ち挨拶する國分征南極 OB 会長

松原廣司氏(第 21,29,46 次隊員、茨城支部)

東信彦氏(第 30,36 次隊員、長岡技術科学大学学長)

帖佐正和氏(第 38,39 次　しらせ艦長)

大木淳氏(第 25,29,30 次機関科、オーロラ会事務局長)

佐藤薫氏(第 44 次隊員,東京大学理学系研究科教授)

伊村智氏(第 36,42,45,49 次隊員,国立極地研究所教授)

三枝茂氏(第 37 次オブザーバー、一般財団法人
WNI 気象文化創造センター)

熱心に講師の話題を聞く参加者

話　題

南極教員派遣プロジェクトに参加して　①

第 57 次派遣教員　苫小牧市立拓進小学校　柴田和宏

南極行きが具体的な目標になったのは 6 年前のことです。勤務先の学校で「南極教員派遣プログラム」を知ったのがきっかけです。

「南極で授業をする。」という明確な使命をもって観測隊に参加できることに胸が躍り、すぐに職場の上司に相談をしました。

教員派遣に選出されて間もない頃は「南極の魅力を子どもたちに伝えたい。」という思いを強くもっていました。しかし、夏訓や全員打合せなどを通して観測隊員の姿や任務を知るうちに「観測隊員の姿と任務の意義を伝えたい。」という思いに変わっていきました。

南極での暮らしは学ぶことがたくさんありました。「とにかく、やってみなはれ。」西堀榮三郎氏の言葉を実感として感じる毎日でした。未経験のことや未知のことに挑戦する日々の連続でした。

風発の建設作業、電気ケーブル敷設など、日本では決して経験することのない作業にも携わりました。この経験も子どもたちに伝えたいことの一つです。

南極授業では、たくさんの隊員に取材の協力をいただきながら授業づくりを進めることができました。授業づくりで特に苦心したのは「難しいことを易しくすること」、「素材を組み合わせて伝えたいことを明確にすること」の 2 点です。

専門用語を易しい言葉に置き換えると、言葉の意味が微妙に変わり、研究内容を正確に伝えられなくなることがよくありました。そんなときは隊員と何度も話をしました。たくさんの隊員に感謝です。

今回の南極授業で私が伝えたかったテーマは「南極観測隊がつなぐもの」です。

観測隊員同士が互いに心をつなぎながら任務にあたっていること、南極の厳しい自然の中で命をつなぎながら生活していること、今行っている研究によって、地球の過去と未来

をつなごうとしていることなどです。

様々な「つなぐ」を通して、観測隊員の姿と観測の意義を伝えました。

授業を受けた子どもの感想には「地球の未来のために命がけで観測をしている隊員たちはすごい」「私も南極に行ってみたい」などたくさんの思いが綴られていました。

教える専門家である教師が取材をし、南極から授業を行うことは、南極観測活動を広く一般に広める点や、次世代の観測隊員を育成していくうえで大変有意義なものです。

一方で、現状の教員派遣には課題もあります。それは、2 人の教員で合わせて 3 度しか授業ができない点です。

夏作業中にたくさんのスタッフを必要とする南極授業を何度も行うことは困難です。教師 2 人で対応できる簡易版の南極授業を何度も行うことを検討しても良いと感じています。

南極・北極科学館と昭和基地をつなぎ、毎週末に 15 分程度のミニ南極授業を行うことを提案します。

私の今後の目標は、日本各地で年間 10 本の講座を開催することです。

年間 10 回は容易ではありません。けれども、自らが動き、主催者兼講師となってより多くの子どもたちに観測隊の姿、観測の意義、南極の魅力を伝えていきます。

南極教員派遣プロジェクトに参加して　②

第 57 次派遣教員　愛媛県立新居浜西高等学校　　渡辺浩志

小学生の時、国語の教科書で学んだ南極観測船「ふじ」の物語。それ以来、南極観測隊に憧れ続けました。その夢を追い求め、大学では地学科へ進みましたが、高校教員となった時点で儚く夢と終わってしまいました。生徒たちには、「南極観測隊員」になるのが夢であったとよく語りました。教え子の中から一人でも観測隊員が出てくれればと、子供たちにその夢を託すようになりました。

８年ほど前、朝日新聞の社説に南極観測船「新しらせ」に関しての記事が掲載されていました。その中で、新造船は船室も増えることもあり、教員等にも南極観測に触れる機会を与えるなどして、幅広く南極観測の意義を理解してもらえるようにするのもいいのでは、といった提言があるのを見て、一度はあきらめた夢がまた膨らんできました。そして、第 51 次隊より「教員南極派遣プログラム」が始まりましたが、応募をするも落選続きに 50 歳を超えた直近 2 回は、再び夢を諦めるための応募となり・・・、5 度目の今回で最後にしようと決めていた中での派遣決定となりました。

2 月 5 日。第 57 次隊編成の「南極合唱隊」により本校の校歌が南極の空に響き渡り、「南極授業」がスタートしました。40 年以上の万感の思い、教員生活 30 年の集大成です。南極の自然だけでなく、基地の概要や観測・設営業務などを満遍なく伝えることに主眼を置きました。1 次隊娯楽棟から発展させた昭和基地紹介。白夜の南極に焦点をあてた太陽光集熱炉の検証実験（水温上昇・点火実験）や太陽の動き方の日本との比較。雄大な自然と野外オペの活動紹介。若手研究隊員や風力発電 2 号機の建設リーダーの出演。質問タイム。隊員の方々からの生徒へのメッセージ・・・。あっという間の 60 分でした。

生徒の感想を紹介します。

「たくさんのことを知ることができた。南極に行ってみたいとも思った。隊員のメッセ

ージは、とても心に響き、自分も夢をあきらめず努力しようと思った」

「隊員の言葉に感動し、涙が出そうになった。その言葉の影響で、勉強頑張れています」

「南極は僕たちと無縁だと感じていたが、僕たちの先生が行き、授業を受けることができて、とても近い存在となった」

今回感じたのは、やはり現場の教員が伝えることの重要性です。生徒の感想に表れた予想以上の反応を見て、その教育効果の高さに驚嘆しています。現在は現場に復帰していますが、多くの生徒から南極での活動の様子を質問されます。将来、「南極授業」を受けた生徒の中から観測隊員が出ると確信しています。最後になりましたが、今回の派遣に際しましては、国立極地研究所のみならず、OB 会の方々のご理解・ご支援を頂いたものと感謝しております。今後とも「教員南極派遣プログラム」という貴重な機会が継続・発展することを願っております。

本校の HP にも「南極ものがたり」と題した通信文を掲載しています。機会があれば、ご一読頂ければ幸いです。

南極関連情報

第 56 次越冬隊および第 57 次夏隊の帰国

平成 26 年 11 月 25 日に日本を出発した三浦英樹第 56 次越冬隊長以下 26 名および平成 27 年 12 月 2 日に日本を出発した門倉昭第 57 次観測隊長兼夏隊長以下 32 名（同行者含む）が、平成 28 年 3 月 27 日（金曜日）に帰国した。

第 56 次越冬隊および第 57 次夏隊の帰国報告会および歓迎会

平成 28 年 4 月 15 日（金）、国立極地研究所主催の第 56 次南極観測越冬隊、57 次同夏隊の帰国報告会、歓迎会が明治記念館「鳳凰の間」で開催された。報告会の冒頭で白石和行国立極地研究所所長より挨拶があった。昭和基地への接岸ができ、1037 トンの物資を輸送、燃料タンクが満杯になり、大型大気観測レーダー計画（パンジー）がフルスペックで観測に入ったことは喜ばしい。また、第 57 次観測隊の帰路、観測船しらせ（大鋸寿宣艦長）により、オーストラリア隊観測船、オーロラ・オーストラリスの座礁事故によって帰国を阻まれた 66 名の隊員を観測船しらせによってモーソン基地からケーシー基地まで無事に輸送したことを話された。続いて、谷垣禎一自民党幹事長から南極議員連盟を代表して帰国歓迎の挨拶があった。3 年連続の接岸が出来た事は大変喜ばしく、南極観測はまさに「継続は力なり」であり、氏にとって、南極は少年の時の夢であったと話された。

谷垣禎一自民党幹事長

三浦英樹第 56 次南極観測隊副隊長兼越冬隊長は、2 年連続で接岸ができなかったことによる燃料不足で、越冬隊隊員は 36 年前の 20 次隊に次ぐ 26 名の少なさであったが、一人一人の越冬隊員の仕事に焦点を合わせて越冬観測の概要を報告した。大規模な観測はできなかったものの、普段気がつかなかった物品管理、図書

三浦英樹第 56 次越冬隊長

門倉昭第 57 次観測隊長

南極観測に貢献し極地研究所長表彰を受けた皆さん

整備をはじめ、隊の運営システム、見直しなどに留意して越冬観測を行った。

門倉昭第 57 次観測隊長兼夏隊長は、第Ⅷ期 6 ケ年計画の最後の年として観測について概要を報告した。難航したが 1 月 4 日に接岸を果たし、燃料をはじめ物資輸送を実施した。ヘリコプターは 2 機持っていったがブレードに故障があり、一機運転となったが、輸送をはじめ、多くの野外観測が実施できた。夏隊のミッションは 90 課題に及んだ。帰路はしらせ乗組員の体調悪化で急遽、ケープタウンに寄港したこと、オーストラリア隊を救出したことで、海洋観測に大きな変更があった。最後にドローンによって撮影されたしらせ航海の映像が披露された。

報告会の終了後、同記念館「曙の間」で帰国歓迎会が開催された。白石和行国立極地研究所長の歓迎の挨拶に続いて、来賓の熊田裕通（防衛省政務官）、高木義明（衆議院議員）、宮本岳志（衆議院議員）、大平よしのぶ（衆議院議員）各氏による挨拶があった。本日は南極条約加盟国のスイス、トルコ、アルゼンチン、南アフリカ、オーストラリア、韓国等の大使館、領事館から多数の参加があった。続いて藤井理行（国立極地研究所名誉教授）氏による乾杯が行われ、歓談に入った。しばし歓談の後、大鋸艦長の挨拶に続いて、越冬隊員の参列の前で三浦越冬隊長の挨拶、夏隊員の参列の前で門倉隊長の挨拶があり、宴は大いに盛り上がった。

（神田啓史）

オーストラリア新砕氷船建造

2016 年 4 月 28 日のオーストラリア南極局のホームページによれば、2020 年半ばに新型砕氷船を建造するとのこと。発表資料によれば、経費は 1 億 912 百万ドル（ただし、資本コスト 5 億 29 百万ドル、30 年間の運用・保守コスト 1 億 38 百万ドルを含む）。運用はオーストラリアの DMS maritime Pty Ltd がホバートで行う。詳しい情報は、オーストラリア南極局（http://www.antarctica.gov.au/）のホームページをご覧ください。

連載　支部便り　今号はお休みします

熊本地震で被災された熊本・大分の皆様にお見舞い申し上げます。

今号の支部便りは、九州支部から原稿をいただき掲載の準備を進めてきましたが、4 月 14 日 21 時 26 分に熊本県熊本地方の深さ約 10km でマグニチュード(M) 6.5 の地震 が発生し、4 月 16 日 01 時 25 分に同地方の深さ約 10km で M 7.3 の地震が発生しました。これらの地震により熊本県で最大震度 7 を観測し、被害が生じ、現在余震の続く中復旧に向けた努力が続けられています。南極 OB の中にも甚大な被害を受けられた方もいらっしゃるとの情報が、九州支部から寄せられ、支部からの意見も考慮に入れ、今回は支部便りの掲載を見送ることとしました。

被害に遭われた皆さんが一刻も早く日常生活を取り戻され、復興されることを願っています。

南極 OB 会の本の紹介

南極や北極観測の理解の一助となればと考え、南極 OB 会では会員･会友の皆さまの協力を得て、以下の本を発刊してきました。南極観測再開 50 周年、南極観測 60 年を機に様々なテーマの本を出版しています。これらの本の売り上げは南極 OB 会活動経費として活用されています。

南極読本ー隊員が語る寒冷自然と観測の日々ー

南極は、どのような場所で、観測隊員たちは何を調べ、どのような発見・成果があったのか。探検の歴史から、気象、地理、生物、物理観測、生活に至るまでを解説。南極観測隊によって明らかにされた南極のさまざまな成果を、南極 OB 会（観測隊経験者）により執筆・編集。「解説」「南極セミナー」「知識の体系・キーワーズ表」の 3 部構成で、学術成果から観測隊の生活までをそれぞれの経験者視点で紹介している。

2013 年 11 月発刊/240 頁　価格(本体価格) 3,240 円（3,000 円）

北極読本ー歴史から自然科学、国際関係までー

北極はどんな場所なのか。南極とはどう違うのか。今、何が起こっているのか。―探検の歴史から、気象、地理、生物、物理観測、北極域に暮らす人々の営みに至るまで、北極の専門家がビジュアルに解説。北極の温暖化や北極海航路など、いま注目の話題が満載。
南極読本と合わせて、地球のふたつの極にある冷源域の理解を深めてほしい。

2015 年 10 月発刊／220 頁　価格(本体価格)　　3,240 円（3,000 円）

南極観測船「宗谷」航海記

「宗谷」乗組員・観測隊員が初めて共同執筆でまとめた、「宗谷」各部署の業務、船内生活、観測の記録。当時の船内の様子を垣間見ることができます。オビ号、バートン・アイランド号による救出、タロ・ジロのエピソードなども詳しく紹介しています。

2015 年度　住田正一海事史奨励賞を受賞！！

2014 年 12 月発刊／280 頁　価格(本体価格)　　2,700 円（2,500 円）

南極探検船「開南丸」　野村直吉船長航海記

“開南丸”野村船長がいなければ日本南極探検隊長　白瀬矗は南極大陸に到達できなかった！？白瀬南極探検隊・野村直吉船長の手記を公開！航海者らしい的確な判断で白瀬隊の危機を救う。直筆の挿絵、技術解説等各種資料も充実。「南極記」とは別な視点もおもしろい。
2012 年度　日本海運集会所【特別賞】受賞！！

2012 年 5 月発刊／172 頁　価格(本体価格)　　3,240 円（3,000 円）

訃報　ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。

（敬称略）

お名前	隊次	部門	逝去月	享年	お名前	隊次	部門	逝去月	享年
貴戸孝夫	海上自衛隊		H27.4	-	三角哲生	会友	元文部事務次官	H28.4	89
高橋秀直	12s	測地	H27.10	84	深瀬一男	4w, 6s	食料.装備	H28.4	83
沖津　進	42s	生物医学	H28.3	61					

2016 年度南極ＯＢ会総会･ミッドウィンター祭の開催について

日 時：2016 年 6 月 18 日（土）受付 14:00 より
場 所：明治大学　リバティタワー　15 階
　　東京都千代田区神田駿河台１－１
プログラム：
（1）　第 20 回「南極の歴史」講話会　：　14：30～15：50　【1153 教室（15 階）】
　　南極観測発足の前夜　：　講師　竹内哲夫（東大山の会）
（2）　南極ＯＢ会総会　：　15：45～16：45　【1153 教室　（15 階）】
（3）　ミッドウィンター祭(南極倶楽部同時開催)：
　　17：00～19：00　リバティタワー17 階食堂『暁』　会費　4,000 円
会員の皆さまの沢山の参加をお待ちしています。詳細は、同封リーフレットを確認ください。

2017 年版南極 OB 会小型カレンダー掲載用の写真を募集します！

観測隊に参加された OB の方々のとっておきの写真を、ぜひカレンダーの１ページに掲載させてください。被写体は広く一般受けするものより、観測隊 OB の皆様が懐かしんだり、楽しんだりできるものを歓迎いたします。

写真はＡ４に印刷されます。お送りいただく素材はネガ、ポジ、プリント、数値ファイルを問いません。モノクロでもカラーでもかまいません、最終版はこちらで作ります（この点ご了承ください）。

お送りいただいた素材は、後日ご返送いたします。また、素材は 2017 年版カレンダー以外には使わないこととします。

掲載のお礼は、小型カレンダー１部とさせていただきます。
ふるってご応募いただきますようお願い申上げます。

締切り：２０１６年８月末到着
送り先：〒101-0065　東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301
　　南極 OB 会 小型カレンダー係
数値データの送り先：nankyoku-ob@mbp.nifty.com

南極 OB 会アーカイブ事業報告

南極 OB 会は元観測隊員等が保管していた隊運営資料、生活一般資料、観測・設営機材、装備・衣料品、記録ノート、スライド、写真、グッズ等を常時、受け入れています。資料の受け入れについては南極 OB 会事務局にお気軽にご相談ください。

（アーカイブ受け入れ資料）

・2016 年 2 月 16 日 受付、第 4 次越冬隊 村石幸彦氏より資料提供

南極だより（第 2～7 号、家族向けの情報誌、南極本部事務室編集、南極後援会発行）、福島直氏への書簡、戸田新聞（第 4 次南極観測隊戸田総合訓練の新聞）、南極新聞（第 4 次隊、第 1～29 号、宗谷発行、昭和 34 年 10 月～35 年 1 月）、南極新聞（第 5 次隊、第 21～28 号、宗谷発行、昭和 36 年 2～3 月、福島隊慰霊祭特集号）、文部広報（第 300 号南極観測特集号、文部省大臣官房発行）、週間朝日（臨時増刊、南極 7 年の記録）、鎮魂の譜（理研 OB 会報 43 号、小玉正弘著）。

・2016 年 3 月 30 日受付、第 13, 26 次越冬隊 村山治太氏より資料提供

鳥居鉄也消印コレクション（第 1 次～27 次隊）

＊＊＊　広報委員会からのお知らせ　＊＊＊

〇通信費納入のお願い

年度初めに当たり通信会費の納入のお願いと振込用紙を同封しました。また、会員の皆さんから通信費納入状況についての問い合わせが多いため、過去（5 年間）と今年度の通信費納入状況を封筒の宛名ラベルに記入しています。確認の上、通信費の納入をお願いします今年度最初の会報を皆さまにお届けします。

【編集の終りに】

➢ **日本極地研究振興会からのお知らせ**

南極と北極の話題が詰まったメールマガジン（無料）が(公財)日本極地研究振興会から平成 27 年 4 月 1 日に発行され引き続き登録された皆さまに情報を届けています。振興会ホームページ（http://kyokuchi.or.jp/）を参照ください。

また、フェイスブック（Facebook）を平成 26 年 12 月から運用しています。南極からの話題を含め知ることができます。

➢ **南極観測 60 周年記念事業と募金について**

事業を進める上での寄付金をお願いしています。詳細は事務局にお問い合わせください。

➢ **記念切手**

最近元職場の先輩から最近のものや、昔のものなど、南極関連の切手を頂きました。右はその一つです。スタンプの日付は昭和 32 年 7 月 1 日。封筒の中には、「カバーは日本南極観測隊員が磁気観測をしているところ。カードはカバーの原写真を撮影された観測隊員の村内必典（さだのり）氏（国立科学博物館勤務－地震学)」と和文・英文で記載されていました。OB の皆さんは多くの南極関連のお宝をお持ちと思います。アーカイブ委員会報告の事例を参考に適宜南極 OB 会へご相談ください。

****

南極ＯＢ会事務局　〒101-0065　東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301
電話　：03-5210-2252　　FAX　：03-5275-1635
メール　：nankyoku-ob@mbp.nifty.com
郵便振込：加入者名　南極ＯＢ会　00110-1-428672
南極ＯＢ会ホームページ　：http://www.jare.org /

****